

〔コートジボワール／ガーナ／トーゴ〕

西アフリカ・地域計画への期待と課題
— 発展を見据える主要都市間回廊・取り残された地方 —

梅村 絢矢

(株)オリエンタルコンサルタンツグループ
プランニング事業部 都市地域開発・防災部 課長

初めてのアフリカ大陸へ

2016年4月、私にとって初めてのアフリカ、コートジボワール国の最大都市であるアビジャンに降り立った。そこは想像した以上の大都市であった。2000年代は内戦の影響もあり、経済成長はしばらく滞っていたが、2015年にはJICA支援の下で都市計画マスタープランも策定されるなど、近年はさらなる都市の発展への期待が高まっているところである。

私は、西アフリカ地域において、タイプの異なる二つのプロジェクトにかかわることになっており、ガーナ、トーゴ、コートジボワール内陸の都市

地域計画という可能性

ブアケにも赴くことになった。これにより、アビジャンのような大都市にいたるだけでは理解し得なかった、西アフリカ地域の現実を知ることができた。

JICAによる「西アフリカ成長リング回廊整備戦略的マスタープラン策定プロジェクト」は、コートジボワール、ガーナ、トーゴ、ブルキナファソを対象とし、主に内陸部から沿岸部に至る回廊を強化し、地域全体の発展を目指すものである。このプロジェクトの過程で、沿岸部の回廊が、内陸部の発展においても重要であるとの方向性が打ち出された。沿岸部の回廊は、アビジャンーラゴス回廊と呼



国名：コートジボワール、ガーナ、トーゴ
関係主体組織名：JICA
業務従事期間：2016年4月～のべ3.26カ月

UMEMURA Junya

1980年愛知県瀬戸市生まれ。北海道大学およびヨーロッパへの留学を通じて、建築と都市計画を学ぶ。設計事務所勤務の後、2009年より、発展途上国における都市地域計画、都市開発業務に従事。



写真1 アビジャン市内の道路 (2016年4月8日)

都市圏の
空間開発コンセプト

考えが、プロジェクトチームおよび関係政府の共通認識となった。

私は、この空間開発コンセプト作成

のため、陸路と空路を併用して現地を見て回る機会に恵まれた。大都市が連続していると言っても、都市間はただただ広い荒野や農地が続き、都市圏が近づくと、延々と郊外の住宅地が続き、徐々に都市部の交通渋滞に巻き込まれていく。

空間開発コンセプトの作成では、都市部ができるだけまとまりを持つように都市成長の境界を示し、その中で都市構造と土地利用の方向性、主要な道路インフラを示した。複数の都市

が互いに刺激しあいながら、連続性をもつことが、内陸部の活性化に重要であるとの考えを、空間開発の方向性として落とし込んだものである。

地方都市の現実

もう一つのプロジェクトは、コートジボワールの内陸部にある第二の都市、ブアケを中心とするベケ州を舞台とする「コートジボワール国中部・北部紛争影響地域の公共サービス改善

小学校の建設事業のニーズ把握から施工監理モニタリングまでを、自治体職員とともに進めるというのが、このプロジェクトである。

私は、この中で小学校建設事業の後半部分を担当した。パイロットモデルとして選定された小学校のいくつかは、ブアケから車で数時間走った村落部にあり、素朴な村の子供たちの笑顔に癒されつつ、この業務を通して、沿岸部の主要都市と内陸部の大きなギャップを知ることになった。

地域格差と地域開発

地方都市の周辺の村落を見たこと、海岸沿いの回廊地域で夢見ていた将来の経済成長の可能性を冷静に見直すことができた。海岸沿いの南部と内陸部の格差は、都市のフィジカルな整備の度合いだけでなく、人びとの生活様式の違い、行政組織体の能力等、さまざまな意味での格差である。アビジャンラゴス回廊に力を注ぐことが、どのように地域全体を豊かな発展に導いてくれるのだろうか？プロジェクトチームで立てた戦略を信じながらも、根本的な問題意識が改めて感じられた。



写真2 建設した小学校でのセレモニー後の様子 (2016年6月13日)

のための人材育成プロジェクト」である。コートジボワール内戦のあった約10年、特に地方自治体がすべき公共サービスや都市開発などが停滞した。そのため、地方行政職員はこれらの経験を積むことができずにいた。そこで、地方自治体の能力強化と、分散化と地方分権が進む中で地方行政サービス実施体制モデルを構築することを目標に、給水施設整備、

小学校建設にあたっては、行政側では、職員と予算が不足していることで施工監理や維持管理が十分になされなという点、内戦中に能力強化や制度改善が行えなかったことが課題であった。また、建設業者側でも、公正なプロセスに則った入札を行える業者がブアケにて見つからないこと、そもそも低い建設技術等々：課題が山積みであった。これが第二の都市の周辺の現実なのだから、他の地域がさらに酷い状態にあることは想像に難くない。幸い、このプロジェクトを通して、中央政府の意識の向上もあり、今後他の地域に展開するための構想も上がっている。

西アフリカ地域の滞在で得た経験は大きく、地域開発による可能性、地域の発展を牽引するインフラ開発の必要性を感じながらも、主要都市と地方との格差という現実を知り、地域が発展する難しさを痛感した。複数の都市間の将来のロードマップを示す地域計画はとてもチャレンジングであるが、非常にやりがいがあり、今後も継続的にかかわりたいと感じている。

(担当編集委員…浅本晋吾)